
夢の中の少女

大輔華子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢の中の少女

【Nコード】

N7879L

【作者名】

大輔華子

【あらすじ】

慣れない新しい赴任地で、一人の高校女教師が向き合う大きな社会問題と事件。

物語は不思議な体験を経て、その結末へと向かう。

<—>

昭和四四年（一九六九年）の秋。

国内の景気は、数年前のいわゆる『証券不況』を完全に脱し、東京オリンピック以来の好景気を迎えてきており、また、翌年の一九七〇年には、大阪千里地区で日本で初めての本格的な世界博覧会が開催されるとあって、列島はわき上がっていた。

石川里華、現在二八歳。現役の高校教師である。

里華の父は、埼玉県U市にある中小企業のとある生産工場に、作業員として永年勤務している。

このところの好景気は、特に大企業の金余りを多くもたらし、積極的投資やいわゆるベンチャー企業の買収が盛んに行われていたが、多くの企業の思惑は、中小企業の『技術』のみを吸い上げるものであり、きわだった技術やノウハウを持たない底辺の作業員にとっては働く場を失うことにもなりかねず、必ずしも買収は歓迎されるものでもなかった。

里華の父が勤める会社もご多分に漏れず、関係先の大会社に吸収されて付加価値の高い設備や技術員が吸い上げられ、残った古い生産工場は閉鎖となったため、父は唐突に親会社の生産拠点である兵庫県N市の工場へと転勤を命ぜられた。

それは、大企業内での異動・転勤ではなく、強引な企業の買収によるものなので、当然のこと、買収された会社に働く作業員家族の生

活環境などまったく考慮に入れられたものではない。

里華の父の同僚はほとんど転勤をあきらめ、自主退社・転職の道を選択し、父も一度はそう考えたが、もうまもなく五十歳を迎える上にとりわけ手に職もなく、容易に転職もままならないため、収入の安定を求め遠隔地への転勤を選択、決意した。

里華は父母と同居していたが、いつそこの機会に、現在の地で両親と別居し一人暮らしを、とも考えた。

しかし、病気がちで満足に家事をこなせない母の事情を考え独立を決めかねていたところ、現在勤務している私立の高校で、兵庫県N市の隣にあるT市内の別な私立高校へ教員として勤務できるよう斡旋してもらえたため、独立をやめて、両親と共に住み慣れた地を離れることにした。

里華の勤めていた高校では、学力評判が低落して、このところ急激に応募生徒数が減少しており、里華が自分の意志を十分に固める前に学校側で斡旋^{あっせん}に動いたことは、だぶついていた教員を減らすためのものであったのかもしれない。

遠隔地の高校への再就職にあたってまず里華が気にしたことは、『自分は、関西弁が大の苦手である』ということであった。

あと、もう一つ。

『声変わりのした男子高校生の関西弁は特に苦手であり、髪の毛が逆立ちそうになる』ということだ。

しつこいようだが、さらに、

『やたらテンションの高い、女子生徒の関西弁はさらにもっと苦手であり、トイレがやたらに近くなる』ということだ。

これは、里華がかつて関西方面の公立高校で一ヶ月間ほど教員研修を行ったときの苦い経験を思いおこしてのことである。

教室内で女子生徒の関西弁が飛び交うなか、教壇でひたすらトイレに行きたいのを我慢していたことがあって、以降、授業中これを耳にすると、条件反射でそうなってしまうのだ。

まさに理科で習う『パブロフの犬』状態を、教師自ら身をもって実験検証しているようなものである。

こんなことも含め、里華は赴任前から、いろいろと不安をつのらせていくばかりであった。

T市の高校に実際に勤務してみて、里華の嫌な予感はいいたい中していた。

里華がもと勤めていた高校は、一クラスの特進組を除いて、生徒の『程度』は同じ県内の私立校のなかでも水準の低いほうであったが、新しく勤めるT市の高校は、もと勤めていた高校よりさらにひとランクかそれ以下のレベルであった。

そもそも、生徒の問題以前に、教員サイドに問題がある。

校長先生は、地元のもと大地主の御曹司で、大きな校内行事のあるとき以外は滅多に学校へ姿を見せない。

校長先生が学校にあまりいない、と言うこと自体、教職員や生徒の統制上かなり問題があるが、問題はもっと深いところにある。

例をあげればきりはないが、例えばある日、校長先生が大阪で開催の『私立高校教育研究会』に出席しているはずの日に、昼間から有馬温泉の高級旅館の宴会場をひとり借り切つて、素っ裸で旅館の仲居さん数人と野球拳をやっているのを、たまたま休みを取つて同

じ宿に泊まりに来た同校の保険医さん夫婦が目にした、などということがある。

研究会に出席した翌日は、いつも研究レポートを自宅の書斎で取りまとめる日として在宅勤務となっていたが、仲居さんとの裸踊りを本人が知らずに目撃されたその翌日も、やはり予定表では『研究レポート取りまとめ（在宅）』となっていたらしい。

いったいどんなレポートか、教員たちは見てみたいものだと思っていたが、その日を含む大半のレポート内容は秘密のベールに包まれたままで、だいたい全体の1割を超える数のレポートを見た者は誰もいない。

校長先生の予定は、ウィークデーのほとんどの日が、研究会やセミナーとそのレポート作成、で埋まっているが、明らかに研究のしすぎのようである。

ことほど左様に、教員たちも欠務がちになっており、月二回の定例報告の日以外、校長を除く教員全員がそろつことは結構珍しい。

里華が初めて学校を訪れた際に応対した教頭先生は開口一番、

「センセ。よろしゅう頼んまつせえ。ウチの生徒は、皆『サカリ』がついとるやさかい、気いつけなあかんで」

（最初のご挨拶がそれ？）

「あっはい。頑張りますので、どうぞよろしくお願い致します」と
里華。

自分で言うておいて、何を『頑張る』のかさっぱりわからず里華は混乱した。

里華は、大学の講師くずれの、物理の教師である。

専門学科の教師として教壇に立つときは、ただ講師のように黒板を

見ながらしゃべるだけにして、あまり生徒にかかわらないようにしていたが、四月からはいよいよクラス担任を任されることになり、そうはいかなくなった。

「センス。ワイ、センスのこと好きやねんけど、センス、ワイのこと、どう思てはる？」

からかわれていることを分かっているにも、突っ込みを返すことができない。

女子生徒が甲高い声で、

「ホンマにもう、やめときーや。センス赤うなってるやさかい！」

この言葉で、里華のなかで、条件反射『パプロフの犬』の実験検証のスイッチが入る。

急にトイレに行きたくなってムズムズしてきたのだ。

里華は日が経つにつれ、ストレスがどんどん溜まっていく自分を感じていた。

五月になり、里華の勤める学校の中学部の生徒全員を対象にして、この辺りの地にも古くからある、いわゆる『部落差別』に対する『戒め』を主旨とした、ドラマ仕立ての映画が学校の講堂で上映された。

里華はまだこの類の映画を鑑賞したことがなかったため、生徒たちと共に鑑賞した。

ドラマは、戦後まもなくの、かなりさかのぼった時代の設定だった。

ラストは、ひどい差別を受け、医者にも治療を拒否され続けた父親が、とうに死んでしまっている我が子を抱きかかえ、差別を行った人々の間を泣き叫び、抗議しながら、何分間も練り歩くシーンであり、まわりの差別したものは皆、うつむいたまま何も言わない、何も言えない、といったものであった。

中学の女子生徒の多くは、映画を鑑賞したあとすすり泣き、男子の中にも声を出して泣く生徒たちがいた。

里華は、教師として恥ずかしながらも、我慢できず、職員室に戻ってから「おーい。おーい」と大きな声を出して泣き、他の教員たちの注目の的となった。

里華の手のつけられない状態に、他の教員たちはしまいにはあきれ果て、黙々とそれぞれの自分の仕事にもどった。

しばらくして、里華は自分を取り戻した。

里華が気が付くと、職員室の隅では、ひとりの女性教員が隣の男性教員に話をしていた。

「転校生の原田くんなあ。どえらいことやりよってん」

「何や。中学部の原田くん？何しよったんかいな」

「社会科のテーマで、『地域の産業調査してみよう』言うんがあったやろ。そこで原田くん、『商品の流通調査』を課題にしたんやけど、どこへ調査に行ったと思う？」

「？。どこやろ。この辺やったら・・・」

「古原や。古原のマーケットへ行きよったんで」

「ええええええええ？？？。うそやろ」

「ホンマやて。しかも、『この魚はどこから仕入れましたか？』みたいに次々とインタビューして回ったんやって」

「そつらあ、おい。ただじゃあ済まされへんで。原田くんは無事やつたんかいな。せやろな。何ぞあったら今ごろ大騒ぎや」

「なんも知らへんゆうことは怖いもん無しやなあ、思た。原田くんのおかんにすぐ電話して、今後、あこへは二度と近寄らんよう、よう言つといた。どこかでなんか言われても、まともに相手せんように、と釘刺しといた」

「学校で調べてこいつちゆうことにでもなつとつたら、おまはんも危ないで」

「やめてんか。ほんなんなつたら、ウチ知らんで通すやさかい。あんたの名前出しとくやさかい」

「怖　　っ！」

（何のことだろう。フルハラマーケット。二度と近寄つてはいけない？まともに相手するな？）

里華は、不可解に思った。

しかし何となく、他の教員に訊いてはいけないような気もして黙っていた。

<二>

休日の午後。古原マーケット。

市街中心地からかなり外れた、川向こうの窪地にその市場はあった。教員が父兄に、『近寄らないように』と伝えた場所に、今、里華は来てしまっている。

単なる興味本位ではそんなことはできない。

里華は先日、学校の講堂で鑑賞した映画と、なんらか関係があるような予感がして、もしそうであったならば、どうしても現実を目で、そして耳で、確かめておく必要があると考えたからだ。

市場はかなりさびれたものであったが、外観そのものに特段変わった様子も感じられない。

しかし、里華は屋根のある市場の真ん中を歩きながら、店員たちの異様ともいえる強い視線をまともに感じていた。皆、いらっしやい、とも何とも言葉を発しない。

里華は歩きながら、あっさりとここへ一人で来たことに後悔していた。目を合わせないように通りぬけようとするが、だんだんと膝が笑って、いうことがきかなくなってくる。

(まず、何か買おう)

里華は、いくらなんでも客に対してはいきなり変な態度はとらないだろう、と考えた。

極力店員と目をあわさないようにして、近くの店につつむきながら入っていった。

(ひやかしと思われるとまずい)

里華はそう思つて、店に入るなり財布を取り出し、すぐに購入の意思表示をしてみせた。

正面には背の低い老人が座っていた。

後ろを振り向いた。

四人の男が、今里華が入ってきた店舗入口の両側から、それぞれ二人づつ頭だけ出してこちらをじーっと観察している。

(ここはいったい何を売ってる店?)

気がつくと、さまざまな大きさや形のリヤカーと台車ばかり並んでいる。

正面の老人は口を開いた。

「なんぞ、欲しいもん、言つてつかあさい」

「あ、あの、お値段が書いてないもんで、ちょっとわからないんですけど」

「ええよ」

「は?」

「ええつちゅねん!おまはんの好きな値で」

「はい」

はい、とは言ったものの、里華には、リヤカーの値段などさっぱりわからない。

「あのこれ」

里華が一番近くにあった小さなリヤカーを指差して、「いくらですか?」

「そつりゃあ、小さすぎてあきまへんなあ。こつちのほうがあええで」

「は、はい。そうします」

どちらが客なのかよくわからない。
それでも、結局里華は、五百円で大きなリヤカーを購入し、店を出ることができた。

空のリヤカーを引きながら市場の真ん中を歩く里華に、一変して皆の和らいだ目が注がれるようになった。

(よし。何も恐れることはない。しかも極端に安いみたいだ。今度は何を買おうかな)

「ええ酒が手に入ってんねんけど」

「はいはい」

ジョニーウオーカーの黒が見えたので、それを頼むと、おまけで日本酒の一升までつけてくれた。

「五万円です」

「えっ？」

「やっぱり四万五千円でええわ。おなごはんやから。一応」

(一応ですって?!・・・いついえ、そういうことではなくって・・・)

そうか。さっき、リヤカー代を払っていたとき、やたら手元をじろじろ見るな、と思ったけど、あのじじい。しっかり財布の中身まで見ていたんだわ。まったく油断もスキもあつたものじゃない。(

里華は財布がほとんど空になったので、とり急ぎ商店がきれいところまで一気にリヤカーをひいていった。

そこには、波板のトタン製の壁と屋根でつくられた、大きな二階建ての建物があつた。

鋼板の亜鉛メッキがところどころはがれて茶色い錆が流れている。

側面には窓もある。

窓の外には、鉄パイプがせり出っていて、パイプの半分くらいまでシャツとかズボンが乾してあった。

里華は、その一番端に乾してあるシャツを見て、何だか目頭めがしらが熱くなってきた。

大人用の衣服に並んで、小さな子供用の衣服が一枚。

首周りが擦りきれていて、また、片方のわきの下の部分にははつきりわかるような大きな穴があいている。

裾もほつれて、子供服としては、見るに堪えない、みすばらしいものだった。

しかも、その服が、寄り添うように隣の衣服に触れている。

(何で？子供の服すらも買ってあげられないことないでしょ？)

里華はいたたまれない気持ちになった。

出入口が開いていたので、話を聞かせてもらおうとリヤカーをその場に置き、中を覗き込んだ。

「ごめんください」

返事がない。

中に入ったすぐのところベンヤのついたてがあり、その先がまったく見通せない。

里華は、奥にも聞こえるような大きな声で、三度「ごめんください」を繰り返した。

しかし、依然返事がない。

「入らせてもらいますよ。いいですね」

『勇氣』というより、いたたまれないような、割り切れないような気持ちだが、里華を大胆にしていた。

建物の大きさからして、幾つもの世帯が入っていることは容易に想

像できたが、中は一世帯づつに分かれた部屋になっているのではなく、ベニヤ板やタンスでもって廊下が幾つにも分岐されており、まるで遊園地の『巨大迷路』のようである。
しかし、遊園地と違って薄暗い。

里華は、『迷路』は得意でない。

トタン製の階段が、先に見えてきたが、このまま進むと出られなくなってしまうと思い、諦めて戻ることにした。

そのとき、今来た通路の真ん中に、ぽつんと立っている幼い少女の姿を見た。

いまだき珍しい、完全なおかつぱ頭。

しかし、前髪を切るとき本人が嫌がったとみえて、額の上の髪はばらばらである。

印象的な大きな目が、なんとも髪型とアンマッチな感じ。

里華はすこし無理をしながら、少女にっこりと微笑みかけ、言葉をかけた。

「こんにちは。大人の人たちはいらっしやる？」

少女が言った。

「奥で寝てるンとちゃうか？あたいの『おかん』はおる。『おとん』はおらへん。

あとはわかれへん」

「あなた、歳いくつ？お名前は？」

「おばはんはどや？」と少女。

(ん！生意気な子供だ)

「私？二八歳よ。でもね、おばはんじゃないの。おねえさんよ。名前はねえ・・・」

少女は、即座に関西弁でたたみかける。

「おばはん。あたいは歳わからへん。でも、誕生日は知つとつ。』
たんごのせつく』や言つとつた。こいのぼり見ながら、みんなで唄、
歌うんやでえ」

「みんなまで？」

「せや。みんなでや。おかんとおとんとあたいや。でも、今はおかんとあたい」

「そう。楽しそうでいいわね。おとうさんは、どつしたの？」

「死んでもた」と少女。

しかし、うつむきもせず、はっきりと言う。

「・・・」（まずかつた）

「ねえ。あなた。自分がなに年生まれか知ってる？」

「知つとる。タツドシや言つとつた。ごつとつ強いねんてえ。空飛んで火いふくねんて」

「辰年・・・ええつと。ああ、今年五歳か」

「ほんまかあ？あたい五歳かあ・・・せやつたんか」

里華は、一瞬、めがしらまたしても目頭が熱くなった。

「お名前は？」

「みんな、あたいのこと、『めぐちゃん』や言うてる」

「めぐみちゃんね」

「いいや、ちゃうちゃう。めぐちゃんやって！」

二八歳の物理の教師が、五歳の少女に言葉では圧倒されている。

市場の人といい、この少女といい、『極貧』という事実に向き合って生きている。

このことだけでも、里華はすごいことだと感じた。

映画で観た『部落差別』と、この人たちの生活に、何らかの関係があるかどうかは、住人たちときちんと話をしてみなければわからない。

しかし、数日前、職員室で聞こえた、『近寄るな。』『相手にするな。』という言葉は、間違えなく差別発言であって、貧困が差別を呼び、その差別がまた貧困を呼んでいるという循環の事実は明らか。なような気が里華はした。

里華は、せっかくここまで来たので、もっと住人と話をして帰ろうとも思ったが、今日の様子では、どうも一回の訪問ではなかなか話を聞かせてくれそうにないと考え、また、日もすでに傾きかけていたので、ここへは、またあらためて訪れることにした。

自宅への帰路、ウイスキーと日本酒を積んだ大きなリヤカーをひきながら、里華が学校の近くを通り過ぎたところで、同校の男性教員とばったりと出会った。

その教員は、目を丸くして里華とリヤカーの両方を見ながら、ぼそつとつぶやくように言った。

「あんさん。なにしょっとんのかいな……」

古原マーケットに行ってきたなどは、口が裂けても言えない。

「ちよつと、酒屋さんまで……」

「リヤカーひいて？」

里華は苦しまぎれに大嘘をつき、大きな墓穴を掘った。

「ええ、酒瓶さかびんがたまってしまって、まとめて家から運んでいったものですから」

「……」

里華はまだこの地に赴任して四ヶ月足らずである。

同校教員は、かなり酒がいける口のほうであったが、里華がどれほどの大酒飲みなのか、とても信じられない、というような目つきをして、顔をひきつらせた。

<三>

関西地方は、すでに梅雨の季節に突入していた。

里華は、初めて古原マーケットを訪れたのち、翌週も、その翌週もクラス担任としての対応や仕事に忙殺され、休日出勤などをしてい

るうち、心の中からいつしか『差別』の二文字が薄らいでいき、今日この日まで、再びそこを訪れることはなかった。

どうやら里華は、学年で最も『程度』の悪いクラスを受け持たされたようだった。

財布などの盗難事件三件。男女生徒の校内での著しく風紀を乱す行為が五件。そして、他校との喧嘩が一件。

ただただ、教頭先生の指示により、もみ消しや謝罪に走り回る里華。何も問題の起こらない日があると、ほっとするくらいであり、里華のストレスは極限状態にだんだんと近づいていた。

里華は、最寄り駅繁華街のアクセサリー店で、今すぐ買わなければならぬ理由もない、安物のイヤリングやペンダントを次々と買いあさるようになった。

そのうち里華は一つ買つと、もう一つを胸の肌着の下に隠し、持ち帰るようになった。

とうとう里華は『万引き』に、その手を染めてしまったのである。里華自身が問題の渦中に入り込んでしまったのだ。

万引きの瞬間のスリル、店を出たときの安堵感。

これは、里華をことごとく愉快にさせてくれた。

しかし、数日後、里華は自宅へ送られてきた封筒を開けてみて、実に心臓が凍るような思いをすることになった。

封書の発信人は『嵐の中の男』とだけ書かれていた。

そして、中には、一枚の便箋に五枚の写真が添えられていた。

その写真は、里華が胸にアクセサリー商品を入れる瞬間のものばかりで、商品も含め、その行為が一目でわかるほど鮮明に写されている。

た。

里華は震える手で、便箋を開いて内容を確認した。

そこには、まるで誘拐犯が送りつけたものかのよう、活字の切り貼りのでつくられた文章があった。

『コノ写真は自分で現ゾウした。すぐにこつ開するつもりはない。ネガフィルムを百万えんデ売る。それでスベテなにもなかったことにスル。』

オレはヤサしいカラ。タダシ誰かほかのモノニしらせたら警察へモツテイク。ガツコウニモバラマク。

来週3日水ヨウビ、朝五時にトウノ神社のケイダイでマツ。金持つてコイ。

オレハ緑いろノスーツ』

自分で現像、プリントをするような者であれば、ネガフィルムの複製などいくらでも作ることができる。

金を出してこれを引き取つても、金がなくなればまた脅迫者は、『金がなくなつたから、またネガを買つてくれ。』などと持ちかけ、キリがなくなるのはよくあるパターンである。

普通、サスペンスドラマなどでは、このあとお決まりの脅迫者殺害の筋書きとなることが多い。

それでも初めは金を用意し、相手に渡さざるを得ないのは、現実も、ドラマも共通している。

教員に採用されてから三年間、独身で、また、ほとんど遊びや買い物をしてない里華には、今約三百万円ほどの預金があった。

里華は、指定された日の朝、五時十分前に、東野神社の境内に入っていた。

上下黒のスーツ姿の里華の上着ポケットからは、厚さ一センチあまりの封筒がのぞいている。

この日、この辺りの日の出時刻は四時四五分で、すでにまわりは白々と明るくなり始めていた。

神社の境内と言っても、広い市営の公園の奥に社殿が二棟ひっそりと建てられているといったもので、祭祀の日以外、神主さんなどが境内にすることはなく、普段は無人である。

公園入口には一応鳥居があり、そこから石畳の参道が拝殿に向かって長く伸びている。

向かって左側には平屋建ての和室市営集会場、その反対側奥のほうには、今は珍しくなった砂場付きの児童公園が設けられている。

里華は境内に入つてまず、異様な光景に気が付いた。

右側奥の児童公園の砂場に小さな女の子がしゃがんでいて、一人で遊んでいる。

こんな朝早くまだ薄暗い中で、小さな子が一人。

その子は、ぼろを身にまとったおかつぱ頭の女の子で、少し距離が離れていて顔はよく見えなかったが、あの日古原マーケットで会った少女、めぐちゃんであることを里華は確信した。

里華は息をのんだ。

しかし、今はその子にかまっているヒマはない。

取り急ぎ少女を見過ごし、拝殿のほうへと進んでいった。

まだ、誰も来ていない。

約束の五時になった。

里華は、今いる拝殿の裏の本殿にまわってみた。

しかし誰の姿もない。

さらに十五分が経過したが、辺りははずめの鳴き声をするだけだ。

里華はぐるりと本殿のまわりをまわってみた。

本殿の先の林の手前、雑草の生い茂る中、草のあいだに緑色の衣服が見えた。

そのまわりの草は半径一メートルほど、真っ赤な血の色に染まっている。

里華は悲鳴をあげそうになって、慌てて自分の口を手のひらで塞いだ。

勇気を振り絞ってよく見るところまで三、四歩近づいた。

緑色の背広上下を着た、男。

少し離れたところに、サングラスが転がっている。

仰向けになって倒れているその男の目は見開いたままで、胸の息もない。

左胸と腹、二箇所あたりにが血のりが集中している。

（私は、絶対に、ここにはいけない！。決して見てはいけないものだ！！）

それだけが里華の頭をよぎった。

里華はいつの間にか四つん這いになっている自分に気がついた。

膝をガクガクとさせながらも懸命に立ち上がり、里華は公園の入口へ向かって歩き出した。

逸る気持ちはあったが、今の状態で走ろうとすると、確実に転んで

しまつと思つたからだ。

歩きながらの途中、里華の目は、砂場にいる少女、めぐちゃんの姿をとらえていた。

少し離れていても、少女と目が合ったことだけは確認できた。

（めぐちゃんは、現場を目撃したのだろうか。殺した犯人を。それとも……）

（いや、絶対に目撃したはず。人間一人が殺されたんだ。いくら幼い子であっても、大きな声や音がして知らん振りしている筈がないわ）

里華は、ゆつくりと砂場に近づいて行って、砂場の手前で再び自分の目を疑った。

てつきり小さなシャベルとばかり思っていた……。

砂いじりをしている少女の手には、血のりがべっとり付いて砂が絡まっている刃渡り二五センチほどの包丁があった。

しかし、少女が男を刺し殺したなどということは考えられない。

「また、あんときのおばはんか」と少女。

「おねえさんよ！っじゃなくて。あつあなた。その包丁どうしたの！」

「どしたんか言われたかて。これうちとこの包丁やで。おかんがいつも使とる……」

「うそ！！向こうで拾ったんでしょ！」

里華は、本殿のほうを指差してそう言った。

「拾たんはそうやけど。元はうちとこのもんや」

「ちょっとそれ、こっちへよこしなさい！」

「嫌や。これ、うちとこのもんやさかい」

(このままだと、めぐちゃんは目撃者として警察に連れて行かれる。私も目撃されている。ああ、いったい私はどうしたらいいの?)

里華は、何が何だかわからなくて、頭が混乱していたが、少女をここに置いて自分が逃げるわけにはいかないと思った。

「めぐちゃん。いい子だからね。ああそうだ。その包丁おねえさんに売ってちょうだい。私、お金沢山持つてるの」

「おかんに訊いてみると。あたいのもんやないさかいに」

(変なところ、律儀な子だね。ようし!)

「ふふーん。これでどう?」

里華は封筒から一万円札を取り出して少女に見せた。

「なんぼや」

「見たこと無いのね。一万円札よーん。欲しいもの何でも買えるの」
「よ」

「パンのみみ。どんくらい買えんねん」

「パンのみみ?」

また、リヤカーのときに続いて、里華にとっては難問だ。

「うーん。これくらいかな？」

里華は大きく両手を拡げて見せた。

「うそやん」

疑うような目。しかし、瞳の奥は少し輝いているようにも見える。

「うそじゃないわよ」

「パンのみみ、揚げたんやったら、どんくらい買える？」

里華はさらに大きく両手を拡げて見せた。

「おばはん。うそつきや。揚げたんは、めっちゃ高いねんで」

「あのね。パンのみみから、話、離れてくれる？おばはんね。違う！違う！おねえさんはね。みみは実はよくわからないの。」

でも、チヨコとかアイスとか知ってる？いっぱい買えるんだよ」

少女はあっさりと包丁を手放した。

里華は、少女に一万円札を渡し、包丁を拾うやいなや、今度は本殿の方へ走っていき、包丁の柄の指紋を丁寧ハンカチで拭き取って、本殿の軒下へこれを投げ入れた。

（すぐに見つかると思うけど、手元に持っていてはいけないわ。それから、それから）

里華の行動は、いつになく素早かった。

薄目を開け、少し顔をそむけながら、男の死体に近付き、緑の背広のポケットを探る。

（ネガがないか。ネガがないか）

ズボンのポケットが膨らんでいるのが目に入った。

里華は、そこから写真のネガを抜き取ると、これを持って一目散に走り出した。

里華が砂場のほうへ戻ってみると、もう少女の姿はそこにはなかった。

(本当にこれでよかったのかしら)

<四>

里華はその日、何事もなかったかのように学校へ行き、授業をこなした。

いつもホームルームや授業中に里華をからかう生徒たちも、里華の『夜な夜なりヤカーで大酒を運んで、河原で鼻ラツパを鳴らしながら、飲んで暴れているらしい』という噂に加え、その日の近寄りがない雰囲気は圧倒されたのか、とてもおとなしかった。

しかし、中には緊張感のない生徒も僅かながらいて、授業中、教室の隅のほうで乳練りあっている男女二人の生徒がいた。

里華はやけに気になって二人を横目でじろつと見た。

次の瞬間、男子生徒が「ひっ、ひいひい」と悲鳴をもらして教室のうしろから廊下に飛び出して逃げていった。

あとに残された女子生徒が、半分肌けた胸と制服のスカートの裾を直しながら言った。

「センセ。堪忍してん。アテとこ、親が食品スーパーやってんねん。肉安くしとくやさかい。堪忍してんか。」

「かおるちゃん。いやねえ。私は猛獣じゃないのよ。」と里華。教室にいた生徒の皆が一斉にうつむいた。

里華は、淡々とその日の教職員日報を提出し、帰宅した。

その日、里華は少女の夢をみた。

薄暗い部屋の中、少女は大きな目を見開き、無言で里華を指差していた。

そして、突然部屋のドアが開き、里華は数人の刑事に取り囲まれ、連行される。

里華は、必死で叫んでいる。

「私は万引き犯です。人殺しなんかじゃありません！」

真夜中に目が覚めた。

そのまま寝ると続きを見そうな気がして、里華はじっと目を開けたまま天井を見つめていた。

そして朝になった。

朝の地元民放ニュースでは、昨日未明に東野神社境内で男が殺害された事件の報道がなされていた。

亡くなった男は、無職の男性で、里華と両親の住む借家から百メートルと離れていないところに住んでいることがわかって里華はぞつとした。

そのあと逮捕された殺人・死体遺棄の容疑者の顔写真が出て、里華は少し胸騒ぎがした。

星野和子容疑者（三十歳）の住所は、T市古原、と告げられていた。古原地区での集落はあのマーケットの周辺だけであり、市場関係者

から逮捕者が出たことはほぼ間違いない。

そして、動機は今のところ不明、としながらも、逮捕の決め手となつたのは、凶器に使われた包丁の持ち主だったこととされている。

（えええー?!）

里華は予想もしなかった展開に啞然とした。

（えええ？もしかして、めぐちゃんの話は本当だった？あの包丁は『おかん』がいつも使っている、と言っていた、あの言葉。）

（お母さんが犯人？でも、もしそうであるなら、いくらなんでも子供を現場にそのままにして逃げることなんて、考えられない）

しかし、ニユースのアウンサーは、そのあと、容疑者が殺害を認める供述を少しづつ始めている、と付け加えた。

人間たるもの、自分自身に『やましい』ことがある場合、逆にほとんど自己中心的になっていくものである。

しかし、とかく本人は自分を正当化してしまい、そういった邪な考^まえは、潜在意識下にしまいこんでしまうので、それに自分自身まったく気が付かないこともある。

里華は、まさに今、そういった状態ではないだろうか。

里華は、めぐちゃんがその後どうしているかを知り、自分にできることはしてあげよう、という気持ちで古原マーケットを再び訪れようと考えた。

これが、自分をごまかし正当化していること。

里華の本心は、誰が逮捕されようが、構ったものではなく、その思考回路は、常に自分の万引きが隠し通せるか否かばかりに向けられている。

本当に状況を知りたかったのは、少女が警察で、里華のことに関して余計なことを言わないかどうか心配だっただけだ。

これは、潜在意識下にしまいこんでいて、里華自身も気がつかない。

里華は次の日曜日まで待つことができず、翌日突然の休暇を取り、古原マーケットへ赴いた。

市場を通り抜け、例の波板のトタン製の壁と屋根でつくられた建物の前まで来て、誰にことわりもせずの中へ入っていった。

迷子にならないよう、十円硬貨を百枚用意し、通路に一メートル間隔くらいで置きながら奥へ奥へと進んでいった。

入口から歩行距離にして百メートルまで、直線距離の最小値でも七十・七メートルまでは進んでも戻れる、という計算である。

遂に行き止まりになって、左右を見ると前回来たときに見かけた階段とは別に幅の広い階段が見えた。

(これはきつと人の住む場所へ通じる階段だ)

階段を上がるとさらに奥へと通路が続いている。

(そんなバカな。二階が一階より広いなんて有り得ない！これはもしかして超常現象?)

あえて言うならば、『超常現象』は里華のほうである。

里華は、物理の教師で、星の位置や動きをいつでも的確に捉えているながら、自分のいるところはよくわからなくなる。

里華は完全に方向音痴を露呈した。

一旦戻ろうと思い、階段を下りると、目印のため階下に置いた筈の十円硬貨が見当たらない。

廊下に置いてきた硬貨も綺麗さっぱりなくなってしまっている。

ふと脇を見ると、十円硬貨をたんまりと籠に入れた馬面の男がこ

にこしながら立っている。

里華は無性に腹が立ってきた。

「あのね。あんたねえ。何やってんの？自分が何やったかわかっているの？」

「もつとあらへん？」

「ないっ！！あってもあんたにだけは絶対にやらない！もう・・・どうしてくれるのよう。」

里華は遂に子供のよう泣き出した。

まさしく迷子になった子供のよう。

そういえば、里華は前の高校の教職員慰安旅行で、方向音痴のため見学先の美術館から自分の貸し切りバスに戻れなくなり、館内放送で『大人の迷子』を伝えてもらったことがある。

このときは、ともかく名前を出されるのが恥ずかしくて、

『ピンク色のカーデガンにエンジのスカートをはいた二十代後半くらいの女性をお預かりしております』と放送され、もつと恥ずかしい思いをした。

「えっ？」里華は、言い知れぬ違和感をふと感じた。

《もとい、である。このくだりは、かつての筆者の実話談である。現実と小説を一緒にしてはいけない》

里華は、はつと思い出したように、突然泣きやんで、

「あんた。めぐちゃんて女の子どこにいるか知ってる？」

馬面の男は一層にこにこしながら、手の平を差し出してきた。

「んっもう……。」

里華は手の平の上に十円硬貨を置いた。

手の平はそのまま動かない。

今度は五十円硬貨を置いた。

「めぐちゃん？ああ。めぐっちなね」と馬面の男。

「そう。おかつぱの。五歳だっつきいてる」

「五歳？せやなあ。そんなくらいやな」

「ごどもの日が誕生日の」

「ごどもの日？ああせやせや。せやった。めぐっち」

「どこにいるのかしら？」

「知らへん」

「……。」

馬面の男はまだにこにこしている。

めぐちゃんはたしか辰年だった。

里華は自分の口から、龍のように火が出ているように感じた。

怒りと哀しみのためか、里華の頭のなかの歯車が、どこかへ一つ飛んでしまっている。

結局里華は馬面の男に五百円を支払って、入口まで送ってもらった。里華が建物を出るとき、さすがに馬面の男も悪いと思ったのか、里華に一言、言葉をかけた。

「あんなあ。ねえちゃん。めぐっちはのう。おとついで帰ってきよって、すぐまたどこぞへ一人で出掛けよった。」

この古原にはおれへんわ。そりゃあホンマのこっちゃで。たぶん、石立公民館か東野の公園あたりや思うで」

「ありがとう」

「あと、ねえちゃん。今度いつペンワイと遊べへんか？」

「遊びません」

<五>

(どうしても今日中に少女に会わないと。二日続けて学校を休むわけにはいかない)

里華は、少女を捜しに、まずは東野神社へ向かった。

境内の入口に着くと、社殿付近はロープが張られており、二名の警察官が中に入らないよう見張っている。

砂場には？

里華はあっさり少女を見つけた。

(間違いない。めぐちゃんだ！)

脇には、破れかけた大きな紙袋があり、菓子パンやテトラパックの牛乳、溶けて流れた出たアイスクリームなどがごちゃごちゃに詰められているのが見えた。

少女がいつ頃からここにいるのかわからないが、一目見て異様な光景であり、このまま暗くなるまで少女一人でいたりすると、まず警察官に話しかけられてしまうであろう。

ともかく長居は無用だ。

早く少女を連れ出して、他で話を聞こう、と里華は思った。

砂場に近づくなり、里華は蒼くなった。

少女はまたも別な包丁で砂をいじっていたのだ。

警察官は少し離れた位置にいる。

少女の持つ包丁に気づいていないのだろう。

里華が最初に見たときのように、ちいさなシャベルを持っているようにしか見えていないのだろう。

（これはまずい。結構ピンチだ。いつかは気がつく。どうやって連れ出そうか。）

里華は砂場を少し通り過ぎてから、今度は警察官の方に背を向けて、『しーっ』というように自分の口に人差し指をあてながら少女に近づいていった。

少女は、ほどなくして里華に気がついた。

「あっ、おばはん。またお金ちょうだい。一万円。包丁あげるやさかいに」

大きな声。

しーんとした境内に少女の良く通る声が響いた。

里華の目は一気に吊り上がった。

（包丁！！って、めぐちゃん。何てことを！！）

さらに少女は、

「何してんねん。『しーっ』とかして。なんぞあったんかいな」と言いながら、無邪気に里華の真似をしてみた。

里華は恐る恐る背後の警察官のほうを振り向く。

警察官はまるで気にしていない。
二人ともに暇そうな顔をしている。

(よかった・・・)
しかし、油断はできない。

里華はわざと大きな声で、少女に向かって言った。

「ほうら、またこんなところに来て。ダメじゃない。砂遊びはやめてもう帰りましょ！」

「何あほなこと言うてんねん。嫌や！包丁買ってくれへんと。今度はちっちゃいお金でぎょうさんやで。一万円札はメンドウや。お店で『どこで拾たん？』やら、いろいろ何やかや訊かれてややこしんや。なあ。包丁買ってくれへん？包丁！」

少女はまだたったの五歳である。

身の丈、里華のウエストほどにも満たないような子供だ。

大人の力で押さえつけらればどうということはない。

里華は意を決して少女のほうに歩いていき、また大きな声で警察官に聞こえるように叫んだ。

「お母さんの言うことをききなさい！！！」

少女の肩と、包丁を持っているほうの腕をつかんで、押さえつけた。
しかし、少女は何も抵抗しない。

里華はやや拍子抜けした。

抵抗するかわりに、少女が一言。

「おばはん。あほとちやうか？」

菓子パンのあふれている、破れかけた大きな紙袋を左腕に、右手には包丁を握りしめ、その腕で少女を抱きかかえながら、必死で走る里華。

少女は暴れもしない。きよとんとしたままだ。

角を曲がったところで、後ろを振り返って覗き、警察官が追いかけてきていないことを確認して里華はほっとした。

「ふうーっ」

ただ、この格好ではどこへ行っても目立つので、里華はとりあえず、一般の人の目にふれない古原マーケットへ戻ることにした。

とりあえず、『破れかけた大きな紙袋』と『包丁』という組み合わせはまずいので、袋に包丁を入れようとしていると、またあの『リヤカー』のときの同校男性教員とばったりと出会った。

その教員は、またしても目を丸くして、里華の姿と少女の両方を見ながら、ぼそつとつぶやくように言った。

「あんさん。なにしょっとんのかいな……」

「ちよつ、ちよつと、お買い物してきたから……」

「包丁持って？」

「あつ、あの。お料理していたからついつかり……。おっちよこちよいね。私って……」

「……。そんなに菓子パンやらアイスやら、きよつさん買う」

て、どないするん？」

里華は苦しきまぎれに大嘘をつき、また墓穴を掘った。

「ええ、私、いつも、晩ご飯のあとデザートで甘いもの食べるの。とっても好きだから」

「……………」

同校教員は、酒だけでなく甘いものも好きな、いわゆる『両刀使い』であったが、里華はどれだけ甘いものが好きなのだろうか、というような顔をして首をかしげた。

同校教員の関心は、里華の奇妙な格好にばかり向けられていたので、脇にいてぼろをまとった少女がどこの誰か、ということまで気にする余裕がなかったことは、里華にとって幸いであった。

<六>

日も傾きかけた古原マーケット。

里華は少女をつれて、市場のリヤカー売り場の中にいた。

店員の老人と里華に四万五千円の酒を売った男がいる。

彼らは親子で、グルだったようだ。

馬面の男も里華の姿を見つけてにこにこしながら店の中へ入ってきた。

ほかにも外からの訪問者に興味をもって続々と男たちが入ってくる。里華は何だか怖くなってきた。

しかし、最初に里華が市場を訪れたときのような、彼女に対して敵対視するような目はない。

里華は彼らの仲間ではないが、どうやら三度目の訪問で警戒心の強

い彼らに受け入れられるようになったらしい。

「おまはん、どこぞの人間やねん」

リヤカー店の老人が言った。

「東野神社の先の私立高校の教員です」と里華。

「わしらは、おまはんのような人間とちやうんやで。毎日命かけとんね。明日死ぬかもわからへん。おまはん、うろつろしよったら今に命落とすで」

「ちよつと話だけ聞かせていただけませんか。訊きたいことがあるんです」

「なんや」

「テレビのニュースで、この古原から逮捕者が出たって流れていたんですが、もしかしてこの子の母親ですか？」

老人は一瞬、小さな片目を大きく見開いた。

「おまはん。（警察）ちやうねやろな」

「逮捕者は、しよつちゆうや」

脇にいた少女が突然泣き出した。

「おかん。うつ、うつ、連れてかれてもた。連れてかれてもーたん」

（強がっていたようでも、やっぱり子供は子供だ）

里華はまた目頭が熱くなってきた少女の肩を抱いてあげた。

（あの包丁は持って帰るべきだった・・・）

「めぐちゃん。あなた、どうしてお母さんの包丁持っていたの？」

「シャベルないやんけ。みんな持つとる」と少女。

「めぐちゃん。あなた包丁で刺した人を見たんでしょ？お母さん、あなたが持ってた包丁で人を刺したの？」

「ちゃう。ちゃう。おかんはあこにおらんよつてに。おっちゃんが二人べちゃべちゃ話しとつて……。」

里華は、いつになく言葉がたどたどしくなった少女の話を聞いて、だいたいの状況を把握した。

里華はその日、五時に脅迫者と待ち合わせをしていたが、その前にもう一人先客がいて、口論になり、その男が逆上して砂場で遊んでいる少女の包丁を取り上げ、脅迫者を衝動的に刺した……。(そういうことか……。これは完全に誤認逮捕だ)

「めぐちゃん。警察に行こう。お母さんは犯人じゃないつて言うのよ！犯人を見たって言うのよ！」

一瞬店の中がざわつとした。

「あほか！！やめとかんかい！！」老人が怒鳴った。

今になって、年端もいかなない容疑者の実の子を連れていって、警察がまともに取りあってくれるとは到底考えられない。しかも本人が自供を始めているとも報道されていた。完全に決めつけられて、自白を強要されているのだろう。

あの日の場面では、少女は確実に現場にいて、しかも凶器を持って遊んでいたのだから、里華が余計なことえさえしなければ警察は事件を目撃したかもしれない少女に対し、何か聴取していたかもしれない。

少女は子供の割にはしっかりしているし、今のうちにちゃんと説明できれば、少女の言うことを鵜呑みにしないまでも、母親の即逮捕にまでは至らなかつたかもしれない。

里華は、自分の万引きがばれることだけを心配して、事件をかきまわし、殺人犯の誤認逮捕という取り返しのつかないことをひき起こしてしまつたことに強く後悔し、そして、自分を恥じた。

「いいえ。誰が何と言おうとも、私はこの子を連れて警察へ行きませす！」

里華は覚悟を決め、言いきつた。

「ひょっとしておまはん。ほんまもんの阿呆か？」と老人。

「ほんまもんのあほうです！！」と里華。

「ママ（飯）食つた夢見て、げつぷするようなもんやで馬面の男が、脇から訳のわからないことを言った。

「いったい何のことよ?! 下品な馬!!」

「げつ下品な馬やって?!」

里華は、下品な馬を無視し、しゃがんで少女の顔をしっかりと見せて言った。

「行く？」

少女は大きくうなずいた。そして言った。

「おかん。迎えに行く。」

涙にまつ毛を湿らせながらも真剣な目。

そして大きな目。

本当に頭のいい子である。

小さな頭で、この状況をほとんど理解しているようである。

ありのままに古原の人間としてぼろを着せたまま行くのが良いのか、それとも身なりを整えて行くのが良いのか、里華は判断に迷った。迷った挙句、やっぱり着替えさせて行くことにした。

市場の中で、新品の衣服と靴を売っている店を見つけ、そこで一揃えのものを買って少女に着せた。

里華の心理は、またしても自分を守るためだけだったのかもしれない。

ぼろを着た子と一緒に歩いていると、自分までが古原の人間と勘違いされるかもしれない、というのが里華の本心ではなかったか。

『差別』とは、とかく、小さなそういう心理が一つつつ積み重なって、連鎖的に拡がっていくものである。

このことに里華は気づかず『偽善者』となっていたのかもしれない。

その『偽善者』は、警察署の前まで来て正体を顕した。

「めぐちゃん。怖がることはないのよ。最初におねえさんが話すから、制服を着た人に公園で見たことを全部言うのよ。」

「うん」

「それからね。あの日のおねえさんのことだけは絶対に話しちゃダメよ。わかった？」

「全部話せって言ったやん」

「おねえさんのこと以外全部よ」

「それ、全部とちゃう」

「全部よ。全部！おねえさんのこと以外全部！わからない子ね！」
里華はいらついで、少女のあたまを軽く小突いた。

少女は急に大きな声で叫んだ。

「全部言ったら全部や。あたい、うそつきは嫌いや。うそつくとま
ま（ご飯）抜かれるんやで。おばはんかて一緒や！」

そしてさらに言った。

「おばはん。袋から一万円出してあたいにくれたやん。包丁くれ、
言うて」

「！！」

「それは今回のことに関係ないの。関係ないことは言わなくていい
ってことを言ってるのよ！」

大声で警察署の玄関前で言い合っていると、入口で見張りをしていた警官が近寄ってきた。

もともと、四、五メートルしか離れていなかったため、会話の内容

まで聞こえていたかもしれない。

「どうかしなはったんですか？ご用はなんですか？」

「いつ、いえ。何でもありません。ちょっと」

とりあえず、里華は少女の手を無理やりひいて警察署から離れた。

手をひかれながら、少女は大きな泣き声を出した。

「おかん迎えに行くんやー。放してんかー。あたい一人で行くー」

里華は、自分はいったい何をしているのだろう、覚悟を決めたのはなかったか、と思いながら、夢中で少女の手をひいていた。

<七>

夕暮れの中、しくしくと泣きながら歩いているのは、少女ではなく逆に里華のほうだった。

すれ違う人は、泣きながら歩いている女性と、これに手を引かれている幼い子供を見て、かなり前のほうから道をあけた。

少女は里華を見上げて言った。

「おばはん。なんで泣いてはるん？大人は泣いたらあかんねんよ」

「今はおらんけどな。おとんがおかんによう言うった。大人は絶対泣いたらあかんて。泣いたら終わりやて。おとんが死んでも泣いたらあかんてー、言うて。」

せやさかい、おとん死んでも、おかん泣かへんかった。あたいもや」

「うわああああ！」

里華は突然大きな声で泣き出した。

そのときたまたま周りにいた小学生たちが一斉に散って、おばあさんが四つん這いになった。

いまさら古原マーケットに少女を連れて帰ることなどできない。

里華は、なかば放心状態で自分の家に向かっていった。

家では里華の母が奥の部屋で寝ていた。

父も会社に行っていない。

里華はしめた、と思い、少女を連れて二階の自分の部屋へ上がった。自宅は決して新しくない三軒続きの長屋建ての借家だったが、二階建ての子供二人用の世帯向けだったので、二階は里華の部屋ともう一つ普段使われていない部屋があった。

里華は、少女をアパートに長い間あずかることなど到底できないことくらい充分わかっていたが、今はどうして良いかわからず、当面は、自分の部屋で少女をあずかるう、と考えた。

せめてもの少しの間だけでも私が面倒を、というような気持ちで、動揺する自分の気持ちを抑えていたのかもしれない。

本当は、自分の万引きに関する証言を、少女とともに部屋に隠匿したい、ということではなかったか。

そうであれば、里華は、もはや救いようもない犯罪者である。

（古原では、少女がいなくなっても搜索願を出す人間などいないはずだ）

彼女はそう考えていた。

しかし、里華の『もくろみ』はその日の夜の出来事により、たった一日で崩れることになった。

その夜、里華の自宅の二階では、少女が、初めて見るふかふかの掛け布団に無邪気に興奮し、転げまわっていた。

「とんとん。とんとんやでえ」

里華は転げまわる少女を捕まえ、まるで嫌がるネコを押さえつけるようにして抱きしめた。

そして涙が少し頬をつたうのを感じながら、里華は、少し上唇の辺りが熱くなつたのを感じた。

（鼻血！？何でこんなときに。泣じゃなくて鼻血なの？）

里華は急に笑いがこらえられなくなって、吹き出した。ぼたぼたと鼻血が布団の上に落ちていく。

「ぎゃーっ！！！！」

少女は飛び上がって里華からあとずさりして離れ、顔を膝の間に向き、その場がたがたと震えた。

あの日、少女の目の前で繰り広げられた『人殺し』の光景。

真っ赤に流れる血。

それは誰にとつても、一生眼に焼きついて離れない、忘れることのできない光景だ。

まして、幼い少女にとっては、すさまじく衝撃的な光景であった筈である。

里華は驚いて少女の方ににじりよった。

少女は里華の顔を見るなり、もう一度、「ぎゃーっ」と叫んで、階段を転げるように下りて行った。

「めぐちゃん！」

里華は夢中で彼女のあとを追ひ、玄関まで転げ落ち、少女と重なった。

少女は玄関をうしろ手に開けて、そのまま裸足のまま夜の闇の中に飛び出して行った。

そのとき、玄関脇の障子越しには、里華の父がいて、彼は障子を開けて仁王立ちに立っていた。

「お、おまえ。大丈夫か。」

里華の父は、里華が階段を転げ落ちる音に驚いて障子を開けていたが、振り返った里華の顔を見てなおも仰天した。

里華の鼻から下は激しく血だらけだった。

「おまえ！すつすぐ救急車だ！！」

「違う。違う。ふがふが。」

「そのまま頭を絶対に動かすな！今すぐに呼ぶから」

「違う。ちがふ。ちがふ。鼻血、鼻血。ふがふが」

まもなくして、里華の自宅玄関脇では、両隣の家族と近所の野次馬が取り囲んで見ているなか、里華がひたすら気を失っている振りをして、薄目を開けながら救急車の中に担架で運ばれていた。

（何でこうなるの・・・？しかもこんなときに。鼻血のバカ！！）

里華は、興奮してかなり血圧が上がっていたため、なかなか血が止まらない状態に陥っていたと医者は言った。

動脈出血ではなく危険はほとんどないが、短時間に再発の恐れもあるので、一日入院して血圧の状況を確認してから退院してはどうか、

とも勧められたが、里華はこれ以上、学校の教員仲間のあいだで妙な噂を流されてはかなわないと考え、鼻に沢山の詰め物をしながら、即日退院した。

<八>

翌朝、里華は、賞味期限の過ぎていない菓子パンを別な紙袋へ詰め、駅前のコインロッカーに入れてから、学校へ行った。

その日の授業が終わると、教職員の打ち合わせを欠席し、その足でロッカーのパンを引き取り、古原マーケットへ向かった。

古原マーケットに足を踏み入れていることが、学校関係者に対してはもろろんのこと、一般の人にも知られてはまずいので、里華は、学校帰りの際、特に人の目をそらすことに注意をはらった。

古原マーケットにすでに少女はいなかった。

昨夜一旦戻ったらしいが、皆の与える食事も取らず、何も持たずに出て行ったという。

里華は、リヤカー店の老人と話をしている、これ以上自分のこと、すなわち、たびたびの『万引き』を隠し通して話を進めることができなくなり、とうとう堪念し、すべての事情を老人に話した。

ところが、老人は話を聞くなり烈火の如く怒り、いきなり里華の髪をつかんでそのまま店の外まで引きずって通りに出し、うずくまる里華の背中と尻を何回も蹴り飛ばした。

そのうち、人々が何ごとかと、集まってきて、うずくまっている里華と脇に立っている老人を囲んだ。

「こいつ、人のもん盗みよって、平気なつらで子供にも教えとる言うで！」と老人。

皆は、互いに顔を見合わせて、驚いたような顔をした。

「ほんまか。」

「ほんまや。」

他の男が言った。

「こいつ。あんじょうよう、（都合よく）帰すわけにやあいかへんぞ！」

そして、その隣にいた女が叫んだ。

「せや、せや。思い知らすんやで！」

「何ぞ盗んどるかもしれへんぞう。全部ひん剥いたれや！」

里華は、全身がたがたと震えたまま、うづくまっていた。

しかし、逃げようとせせず、叫んだり助けを求めたりもしなかった。一人の体格のいい男が前に出てきて、里華の髪をつかんで立ち上げさせ、顔を上げさせた。

男はあまりにも背が高いので、里華はつま先立ちになり、手足は完全に伸びきってしまったている。

数人の女が、後ろで、やいのやいのと手を叩いている。

体格のいい男が言った。

「おまはん。ええ根性しとるの。助けて言わへんのかい」

「.....」

「『助けて』言わんかい!」

「.....」

「ここは（警察も）相手にしいひんねやで。待っとつてもだーれも来いへんねや」

「・・・・・・・・」

「はよ『助けて』言わんかい！『命だけん助けてー』言つて泣かんかい！！」

後ろにいた女が叫んだ。

「やれーや！その女、盗みん女めぞう。ゼーんぶひん剥いて、泥、喰わせつちやれや！」

体格のいい男が里華の髪をつかんだまま、女の方を振り向いて怒鳴った。

「わりやあ、やかっしやい！ええかげん、だまらんかい！！！」

「ひiiiiiiiiiiii」と女。

そのとき里華は男に向かって口を開いた。

「早く、最低の人間を殺してよ・・・」

「なんやと？ワレ。なに言つた？」

「早く殺せつて言つてるのよ。最低の人間が目の前のここにいるのよ。聞こえなかつた？」

「・・・・・・・・」

今度は男のほうが一瞬の無言だ。

体格のいい男は、里華の髪を放し、彼女は男の足元にそのまま崩れた。

男は、里華の顔に唾を吹きかけて言った。

「ワレなあ。もう二度と古原ココへ来きいさらすな！はよ、往いね！！けつたくそ悪いで！！」

後ろで見ていた年増の女が落ちついた口調で言った。

「ダイゴはん。あんさん、なに血迷うてこの女許してまんのか？この女、人のもん盗みよったんやで。しかも、センセイやと？センセイやで。こりゃあ許したらあかんで……。あん時みとつに、みんなの前でやつちゃつてや。はようなあ。」

「やかましい！！だあつとれ！！こんな女やりようたら、こつちまで腐るわ！！！」

少なくとも古原マーケットの中には、間違いなく『人間』がいる。一人や二人ではない。

みんなそうかもしれない。

そして、差別を受け、もだえ苦しみなながらも、その人間の『正義』たるものもこの地域では疑いなく生きている。

逆に『正義』を失った人間が、外の世界にうようよといて、学校で『差別はやめましょう』と言いながら、近寄るな、相手にするな、と言っ。

それに憤っていた里華も、ものを盗み、教壇に立って生徒に教えている。

まさに、ものごと滅茶苦茶である。

里華は、男の足元で、土と砂と男の唾にまみれて横たわりながら、そんなことをぼうつと考えていた。

<九>

里華は、高校での教員生活にも段々と慣れてきて、毎日を淡々と過ごしていた。

関西弁はしゃべれなかったが、他の教員とも冗談をまじえて話ができるようになってきた。

そのうち月日が経ち、里華はこの地へ来て二度目の春を迎えようとしていた。

春になると、里華は、決して忘れることの出来ない、自分自身の万引きのこと、東野神社での殺人事件、古原マーケットにかかわる一連の出来事、そして、少女のことなどを次々に思い出し、ひどく心が痛み、憂鬱になった。

なかでも、一番の想いは、突然姿を見せなくなった少女、めぐちゃんのことであった。

里華は、最後に古原マーケットに行ったあと、少女の行方をしばらく捜していたが、手掛かりになるものは何一つなかった。里華は、少女が一人で生きていける筈がないので、ひたすらもといた、古原マーケットに戻っていてくれることを祈っていた。

しかし、あの日の出来事から、里華が再び古原マーケットに行くすべはなく、会うことはもとより、その確認すら、為すことはできなかった。

普通にいれば、今ごろは小学校に入学しているところである。

当然のごとく、古原地区の子供にも教育の機会は与えられている。

いわれなき差別の根源を語るには、職業上の差別など、古く遠くその歴史を遡らなければならぬが、この世代に残されている、差別が差別を呼ぶ問題のひとつには、この時代の前の世代の差別により教育の機会がほとんど与えられなかったがため、その子の世代、すなわち今の大人世代がまた、差別を受けているというようなことがあった。

この当時、少し前までは、差別を受けている地域の児童と、そうでない児童を分けて、別々の場（学校）で教育していたが、これは、差別の事実を公に助長しているようなものと唄われ、同じ場で教育すべきだ、との『正論』がまかりとおるようになってきていた。

しかし、それはひょっとして差別現場の悲惨さを知らない人たちの『正論』にすぎないものであったのかもしれない。

理想と現実が程遠く、両方の児童を同じ場（学校）で教育した場合は、大人の世界の差別の悲惨さが、そのまま児童の世界に映しこまれるだけ、という苦い現実もあった。

古原地域の子供は、就学年齢になると、たとえ親がいない場合でも保護者に当るものが決められて教育の機会が与えられたが、入学したその瞬間から大人の悲惨な世界に巻き込まれることとなっていたのかもしれない。

（めぐちゃんはいったいどうしているだろうか。学区の小学校にちゃんと行かされているのだろうか。）

苗字は以前逮捕報道された母の姓『星野』、名前は、『めぐみ』ということと、さらに、誕生日もわかっている。

里華は、少女が通うはずの学校を訪ねて、そこで確認してみること

にした。

その学校では、思っていたより、丁寧に対応してくれた。

今年入学の児童で、古原地域の子供は全部で十九名いて、住所が市場とまったく同じ児童はうち六名。

その六名の中に、『星野めぐみ』という名前があった。

生年月日は一九六四年五月五日。

辰年の子供の日生まれだ。

(間違いない。めぐちゃんだ)

その子は、入学式に出席し、その後もちゃんと学校へ通っている、とのことであった。

保護者は、同じ住所の男性。猪野市太となっている。

里華は、どんな男だろう、と思ったが、ひとまずは安心した。

里華は、星野めぐみちゃんに会いたい、と言ったが、保護者ではないので、参観日以外は校内で会うのはご遠慮いただきたい、とやり断られた。

<十>

結婚。

里華は、その翌年の初夏、同僚の国語教員とめでたくゴールインした。

夫は、里華と同じ年で、校長先生の弟の子供、つまり甥っ子だった。

彼の父はT市教育委員会のおエライさんで、兄の校長先生と同様に大変『研究』熱心なようであった。

市役所にほとんど顔を出すことがなく、校長先生とは違い、もっぱら島根・鳥取、それと北陸三県の研究会や連絡会議ばかりに出席していた。

T市の教育委員会の関係の会議が、何故日本海ばかりで行われるのか。

それは、職場内の懇親会のうち三回に一回くらいが必ず蟹料理の店で行われることと何か関係があるような気がしてならない。

そんなことはさておき……。

夫は、親にかなりの金銭的な支援を受け、市内の中心部に持ち家を構えた。

広すぎるくらいの新居で、何不自由ない夫婦生活が始まった。

里華は、優しい夫といるときは、いつも笑顔を絶やさなかったが、結婚してからは学校を辞めていたので、昼間一人になるとたまにふっと少女のことを思い出し、言いようのない虚しさを胸に抱いた。

そんな平穏な日々を送っていた里華の心に、秋口からある変化がおとずれた。

週に一回ほどのペースで、里華は少女の夢を見るようになったのである。

夢の中の少女は、間違いなくめぐちゃんであったが、五歳のころの幼いめぐちゃんではなく、小学二年生になった女の子だった。

少女は、いつも真っ暗闇のなかで、まっすぐに里華を見つめて何も言わずに一冊のノートを差し出す。

表情は暖かい笑顔である。

里華は夢の中でそのノートを開いて内容を目で追う。
ノートに書かれた字、そのものは小学二年生くらいの子が書くにし
ては、幾分稚拙なものだった。
しかし、内容はかなりしつかりしており、意味はよく読み取れた。
里華のみる夢であるから、その内容をつくるのは、当然里華自身で
あつて、彼女の少女に対する想いがそのまま少女のノートを通じて
語られていたのであろう。

《おばはん。元気が。あたいは元気や。

勉強は好きやないから、宿題もせえへん。

それでいつも叱られて廊下に立たされとる。三人くらい。

古原の仲間や。

それで、次の宿題がわからんやさかい、また宿題やってこん言つて
立たされとる。

でも、勉強せんでええやさかい、そんなほうが楽しや。》

こんなことは、里華は決して望んでいない。

気持ちがあふさいでいるとき、夢というものは、だいたいこうなつて
欲しくない、と思つていることが出てくるものだ。

だから、普通は現実と混同しないよう、夢は眠りから覚めるとその
記憶が急激に薄れていくような仕組みになつていられるらしい。

しかし、里華のみる夢は、目が覚めてもずっと記憶に残つており、
翌週はその続きをみることもある。

《おばはん。元気が。あたいは元気や。

昨日クラスでとうなん（盗難）事件があつたんや。

みんなあたいら三人が盗んどるとこ、はつきし見た言つとる。
みんなうそつきでだいつ嫌いや。

あたいは人のもんは盗まへんし、たぶんほかの二人も一緒や。

古原のもんは、人のもんだけはよう盗まん。でも、そんな先生、

ちーとも信じ

てくれへんねや。

そいで、今度は全校朝礼で、みんなのまえで立たされた。

あたいら、恥ずかしゅうて、恥ずかしゅうて、ずうっと両手で顔隠しとった。》

あまりにもひどすぎる仕打ちをうけた夢のなかの少女、めぐちゃんはその中でも笑っている。

里華の意識の中にいる少女は、いつも笑顔ではなかった筈なのに。

いつ、夢の中に少女が出てくるか、里華自身にもわからなかったが、決まって夫が残業で遅くなった日のような気がしてきた。

夫はその父とは違い、外でのいわゆる『女遊び』はほとんどしなかったので、とことん里華を愛してくれた。

夫が早く帰ってきて欲しい、という気持ちを満たされないうとき、里華は少女の夢を見ていたのかもしれない。

《おばはん。元気が。あたいは元気や。

昨日はランドセルほかされた。

もともと勉強せんかったやさかいに、関係あらへん。

せやけど、あたいは哀しんやで。うそやない。

なんぼ勉強せん言うても教科書もノートもないんは哀しんや。

おばはん。信じてくれへんかもわからんけど、これ、ほんまやで《

《おばはん。元気が。あたいは元気や。

給食は食べとるけどあたいらだけおかわりはでけへん。

あたいは勉強でけへんから毎日給食当番せえって先生に言われた。

でも、みんな、あたいらが給食当番すんねやったら、そん給食食べへん言いよる。

先生ごうごう困った。ほんま可笑しかったで。

でも、あたい、先生に頭、がーんてドツかれた。

目の前、真つ暗になつて星みたいん光がぼつぼつしよつて、しばらく目え見えへんかった。

おばはん。あたい、なーんも言うてへんのに、おかし思えへん？

せやから、『あたい、なんもしてへんよつてん、なんでこないどつかれにやあかんねん！』言うたら、

『もいつぺん、言うてみい！』言われて、あたい、おもいつきし鼻のあたまんとこ、どつかれた。

あたい、もいつぺん言うてへんのにやで。

こんどは、星もなーんもでえへんやつたけど、ものすごく痛かったんやで。しばらく鼻血も止まらんかった』

夢の中の、いつも笑顔の少女の口が、ひときわとんがったように里華には見えた。

<十一>

それから、五年もの間、里華は毎週毎週、少女の夢にうなされ続けた。

ただ苦しい、というより自分の夢の内容が悲し過ぎて耐え切れない、というような気持ちで一杯だった。

お願いだから、悲しい話はもう勘弁してと、寝る前の自分に言い聞かせた。

それと、もう一つ、決して変えることのできない事実。

(ごめん。めぐちゃん。私はあなたの一番嫌いな『うそつき』よ。そして、本物の『泥棒』なのよ)

少女が小学校に入学以降、里華は実際の本人には、ただの一回もあつたことがないのに、夢の中の少女はどんどんと成長していった。

最初に少女の夢を見るようになってから、五年後の現在、とうとう

少女は中学校の制服を着た姿で里華の夢の中に現れた。

昔、幼児だった時代、おかつぱ頭だった彼女は、里華の夢のなかでは、もう背中の真ん中あたりまで髪をのばしていて、もう少女というよりは女性にも見えた。

目が大きくはつきりしていることは、当時の実際の少女と同じであったが、その他は断然大人びていて、一目では同じ人間とは気づかないほどの成長のしようである。

しかし、これは、あくまで、想像力たくましい里華自身の夢の中の想像の話である。

実際の少女がどういう姿になっているか、とは全く別の問題である。

T市からN市へ向かう私鉄の駅。

里華は夫の出張帰りにN市のターミナル駅で落ち合い、一緒に食事をしようということになっていた。

子供のいないその夫婦は、恋愛時代の思い出の場所で何度もデートをして、お互いに心が離れるのを『予防』している。

N市ターミナル駅で、予定通り二人は会ったが、夫がもっと別な場所を二人で歩きたいというので、二人はそのまま駅のホームに戻ることにした。

階段を上がりきってホームに出たところから、少し脇に伸びた通路に髭面のホームレスとその脇の黒いタオルケットの上にあぐらをかいている少女の姿が目に入ってきた。

里華はその少女と一瞬目を合わせた。

「……」

少女の顔は、最近里華の夢で見た少女と瓜二つだった。しかし、夢の中の少女と瓜二つ、という表現はおかしい。『夢』はもともと現実ではないのだから。

里華が夢の中で見ていた少女は中学の制服をきっちり着ていた。しかし、目の前の少女は『ぼろ』をまとっている。それでも、顔は里華の夢の中に出てくる少女、夢で成長したためぐちやんと全く同じだ。

(間違いない。めぐちゃんだ。)

里華には、現実と夢の世界を混同しているかなどと考える余裕がなかった。

『似ている』などというものではない。

ともかく完全に夢と同じ顔だ。

少女も里華をじっとみつめる。

里華はそのぼろを着た少女に言った。

「あなた、もしかして星野めぐみさん？」

何も応えない。

その代わりに、立ち上がって里華の脇にいる里華の夫を指差した。

「その男は、東野神社で包丁で人刺した男や」

「えっ？」と里華。

里華の中で、完全に時間も空気も停止した。

「その男は、東野神社で包丁で人刺した男や」

「何？なんなの？あなた、私はあなたが星野めぐみさんかどうかを訊いているのよ。」

「うちのおかん、代わりに逮捕されたんや。」

「うち、見とつたんや。」

まず、里華は目の前の少女が、あのとときのめぐちゃんであることを確信した。

次の言葉、すなわち夫が人を殺したのを見ていた、という発言は心の中で否定した。

しかし、それが矛盾していることを感じた。

両方を肯定するか、両方を否定するか、そのどちらかでなければならぬ。

完全に混乱した里華が助けを求めるのは、夫しかいなかった。

里華は夫の顔を見た。

少女に指を差された夫は最初彼女を無視していたが、少女はやめな

い。
「東野神社。あたいは見とつたんやで。」

「うちのおかん、おまはんの代わりに逮捕されたんやで。何や言うたらどや。」

突然、夫が怒鳴った。

「黙らんかい!!」

里華の夫はむきになって少女につかみかかるうとする。

里華は咄嗟とつとに夫の前にたちふさがる。

「あなた。やめて!!」

(あなた、何故、初めて会った子供相手にそんなにむきになるの? お願い! やめて。あなたを信じさせて!!)

夫は自分の妻、少女の前に立ちふさがる里華を遂にぶん殴った。

里華は一気に飛ばされる。

隣で見ていたほかの男が夫につかみかかってその先を止めた。

いや、止めようとした。

ところが、こんどは夫とその男とが押し喧嘩になる。

その男は夫を一度は押し倒した。

しかし、夫は立ち上がり、とうとうその男をホームの端まで引きずった。

大きな警笛が鳴る。『パーン』

列車がホームに入ってくる。

これを見て、夫はその男をホーム脇から線路上に引きずりおろす。

(人殺し!!)

里華は、横たわっていていたが、体が動かない。
しかし、夫の姿を見ながらそう心の中で叫んでいた。

列車停止が間に合わない。もう絶対間に合わない。
列車がホームを通過。

「きゃーっ。ひとごろしー」ホームにいた若い女が悲鳴を上げた。

ホームで仁王立ちになっていた夫は、周りの男数人につかまれ、ホームの端に引きずられた。

そのあと、警察の公安員が来て、里華の夫は逃げようとしたため、準現行犯で逮捕された。

夫は何故、気が狂ったように関係のない男を殺めようとしなければならなかったのか。

(そこまで追い詰められていたのは何故?)

里華は、混乱して頭に何も考えが浮かばなくなっていた。

<十二>

里華は容疑者夫の妻として、そして目撃者としての両方の立場から警察に同行を求められた。

署へ向かう警察車両の中で、里華はだんだんと正気を取り戻していった。

(夫はたぶん、あの日の殺人事件の真犯人だろう・・・)
後になって思うと、さまざまな状況が里華の頭を巡った。

犯行当日、里華は学校へ通勤したが、その日を含めて三日間、夫は

連絡もなく欠勤していたことが思い出された。

結婚前、二人で新年の初詣の帰り道、たまたま同僚の教員夫婦と会い、東野神社へ一緒に行かないかと誘われたとき、思わず『いいえ！』と叫んでしまった里華の声に、夫の『いや！』という大きな声が重なってしまったこと。

そして、結婚してからすぐの引越しのときに、夫の机の引き出しの隅から出てきた見覚えのある脅迫者からの封筒。

あのときは、つきり里華は自分宛にきた封筒を捨て忘れたいと思い、慌てて夢中で焼き捨てたが、自分宛てにきた封筒はすでに細かくちぎって捨てていたことを今になって思い出していた。

そして、今回の少女の発言。

夫の逆上した様子、殺人まがいの行動。

さまざまな記憶が里華の頭の中でつながっていった。

そして、里華は、はっと気がついたように、小さな声をあげた。

(めぐちゃんは？めぐちゃんをおいてきてしまった。)

今はついに『そのとき』が訪れたのである。

自らの保身のために、少女の母を救えず、少女の気持ちをも裏切つてめぐぬくと結婚し、暮らしていた里華。

その過去を清算するときが今だ。

里華の夫は別件逮捕であったが、彼女は以前できなかったこと、すなわちすべてを警察で話し、その報いを受けることがせめてもの罪ほろぼしだ、と考えた。

しかし、肝心の証言者である少女がいない。

「あの。ホームにいて破れた茶色の服をきていた少女を知りませんか？」

「はあ？ああ、おつたな。その子がどうかしよつたかいな。」

「重要な事件の証言者なんです。今回の件でも一番近い目撃者。」

「ああ。目撃者ならぎょうさんおる。三人やつたか同行してもらつとるから。その子があんだの旦那に有利な証言してもあかんわ。事實は一つだけや。あきらめなはれや。」

そうではなくて、と里華は言いたかったが、今さらどうにもなることではないので、とりあえず警察署へ行って一人で話せるだけ話すことにした。

警察署につくと、里華を先導するように歩いていた署員が、別な男に耳うちし、その男が里華に手招きをした。

里華は警察署の中の四階、『取調室』につれていかれた。同じようなドアが続けて廊下の端まで並んでいる。

男は里華の入室を促して、自分の職名などは一切明かさず、名前だけを言った。

「私、『荒船』いいいます。あなたはん、容疑者、参考人、ちゆうことやあらへんのですけどね。氣い悪うせんとしてください」

続けてフラッシュ付きのカメラを持った男が入室してきた。

「今日の服装記録を取るだけですから」
カメラを構えた男はそう言い、里華は立ち姿のまま四枚の写真を撮られた。

そのうちの一枚は里華の顔を至近距離で写し、彼女は少し目がくら

んだ。

里華は今回の駅ホームでの事件に関する話の前に、七年半前の自分の万引きや脅迫を受けたことから始まり、東野公園での事件、少女のこと、そしてその後、今に至るまでの何もかもを話した。

七年半前にできなかったその日が到来した、と思っていたので、彼女は一生懸命だった。

荒船と名乗る男は、話の途中で何回か里華の話の腰を折って質問をしたが、彼女は訊かれていないこともすべて話しながら、涙を流していた。

相手をしている男はすこし困っていた。

話は殺人事件当日の話と関連する里華自身の万引きの話、それに、今日の少女の証言くらいにとどめておけばわかりやすかったが、間に彼女の夢の話が入ってきたので、事実と想像の境目がわかりにくい。

もう一度整理してみよう、と男は考えた。

駅で会ったのは殺人現場の東野公園にいた少女。

その少女は里華の夫を指差してあの日の神社のことを口走った。

あの日のことを知っているのは少女と里華と犯人以外にはいない。

しかし、でもどうして里華は、駅にいたのがそのときの少女と確信し、声を掛けたのか。

それは夢に出てきた顔と同じ顔だから。

そのあたりの夢の話に説明が及ぶと、男には里華の話のどこまでを信じてよいものかわからなくなる。

男は係の者に内線で連絡して、星野めぐみの住所を照会させたが、

調べた係官の答えは、『一年前の調査により、古原地区で、住民登録を職権削除された人の一人に星野めぐみさんがいる。昨年9月に抹消記録がある』とのことだった。

戸籍はもちろんある。失踪記録はない。

少女は今、いわゆる住所不定の状態だ。

里華は捜してもらえないかと頼んだが、『ちょっとそこまでは・・・』と男が言う。

もうとつくに済んだ筈の事件を夢や何か訳のわからない話でかき回されたくないといった心理もはたらいている。

男は、もうこれ以上勘弁してくれ、とばかりに、里華に、再度連絡するから今日のところは引き取ってもらって指定する日に出頭をお願いしたい、と言った。

里華は「主人にあわせてくださいませんか」と言った。

「わかりました」

再び男は、係の者に内線連絡をして、しばらくしてから係官より連絡があった。

里華の夫はがんとして里華に会いたくない、と言ったという。

里華はいつたいだれを頼りにすればいいのかわからなくなった。

警察にこれ以上上げむたがられて逃げられると困るので、里華はいわば『殿下の宝刀』を抜いた。

「あの、私、万引きしたって言ってるんですけど、それってどうしてくれるんですか。警察は万引き犯の私を放っておくんですか？」

ところが、男は嫌そうな顔をしながらも、あっさりと言った。

「時効、時効。窃盗罪やからね。七年前やる。ちょうど時効やで。七年前のいつや。いやいや、調書はこの部分はなしや。まあ、司法取引みたいなものやな。はは。」

（万引きも殺人も昔のことは触れたくないというのか。なんでもかんでも面倒くさいのか、警察は！！）

<十三>

里華はその後二日間、少女と出会った駅のホームで再会を祈り彼女を捜し、そして待った。

しかし、少女が現れることはなかった。

そこで遂に里華は、以前ひどいめに遭い、二度と来るなど言われた古原マーケットに行ってみる決心をした。

里華にとって思い出だけでも震えがきてしまうような場所。

しかし、そんなことはもう言ってもらえなかった。

住民登録を職権削除したということは、ごく近い同居親族からの申し出によるものでないかぎり、通常役所の調査員や警察関係者による所在確認が行われている筈であり、少女が古原マーケットにいる可能性はほとんどないと言ってよかった。

ただ、少女が過ごしていたその場所以外に、彼女の足取りをつかむため手掛かりになりそうなところはない。

目的は少女が暮らしていた場所に行くことだ。

しかし、そこにたどり着くためには衆人環視の市場を通り抜けていくしか方法がない。

七年経っているといっても、ほとんど外部の人間が出入りすることがないその場所では、里華のことが人々に記憶されている可能性が

高い。

いくらなんでもそのままの姿で再び訪れるまでの勇氣は里華にはなかった。

そこで里華は真剣になって考えた。

(男に変装して行こう。それならべないし、だいいち男のほうが安全だ)

里華は最初、『どじょうすくい』の男のような格好をしていこうかとも思った。

しかし、それはあまりにも今の自分とはかけ離れていて困難であると考えた。

ちようど巷ではその土地柄もあつて、宝塚歌劇のミュージカルによる『ベルサイユの薔薇』、いわゆる『ベルバラ』が大人気であつた。里華は、そこでのりりしい男役を頭に思い浮かべ、よし、その線できこうと考えた。

長かった髪をばっさり切り、里華は『ベルバラ』主人公のオスカルをめざした。

七年ぶりの古原マーケットの入り口付近には小綺麗な商店が数軒軒を並べていた。

看板も綺麗になっている。

しかし、中に入っていくにつれて次第に昔の光景に戻っていくようだった。

里華の身長は百五十八センチ。男としては大分小柄には見えた。

しかし、髪を短くしてサングラスをかけ、スラックス姿の里華は一見して男にみえた。

やはり市場の人々からはじろじろと強い視線を受けていたが、里華はもう少しで市場を抜けようとしていた。

「おい。その女」

（えっ？『おんな？』そんなばかな）

里華はひよっとしてばれたかな、とどきどきしていたが、そんな筈はないと思い直した。声を掛けた男の向いている方向の先には、店頭で荷物の受け入れをしている女がいる。

（あの女のことか・・・）

ほっとしたのも束の間、男はもう一度大きな声で言った。

「おい。その女。ケツのでかいワレじゃい！」

（お尻の大きい女？）

里華は自分で自分を見てから、もう一度男の向いている先の女を見た。

（あの女。痩せている。しかもお尻はめっちゃ小さい。ひよっとして、女って私のこと？）

里華は声を出した男のほうに恐る恐る視線を向けた。

男と目が合った。

その顔には見覚えがある。決して忘れることはない。

あのととき里華の髪をつかんで道に引きずり出した、リヤカー店の老人だ。

（あのじじい。まだ生きていやがった。一番まずい人間に会ってしまつたよ！）

声を出してしまつては女であることがばれる。

しかし、老人はすでに里華のことを「女」と呼んでいる。

それでも里華は思いつきり声を低くして言った。

「なんやねん。なんか用か。」と低音で関西弁のアクセントがどこかおかしい里華。

「けつたいな言い方しゃーがって。ワリヤあ。そんな格好、なんのもりや」と老人。

「せやからなんか用か言うてんまんねんやろ」と低音でさらに言葉までおかしい里華。

「もうええ。やめんかい。全部ばれとる」と老人。

里華は堪念した。

（髪まで切つて何にもならなかった。やっぱり難しくても『どじょうすくい』にしとくんだった）

リヤカー店の老人は、里華を許してくれてはいない。

ここ（古原）には警察のような『時効』の成立はない。

老人は、そのことをはつきりと里華を前にして言った。

しかし、明らかに七年前にあったような怒りはなくなっているよう

に里華には感じられた。
罪を償おうとして、自ら警察に話したということ、里華に聞かされたからかもしれない。

里華は老人とともに市場の先にある建屋のほうに向かっていた。入り口にはまたあのときの馬面の男が座っていた。

男は、里華の顔を見るなり即座に言った。

「あんときのねえちゃん。やっと遊んでくれはる気になりよったんかいな」

「遊びません！」と里華はあのときのように言った。

（すぐに私とばれた。ほとんど変装になってなかったんだ・・・）

脇には紐でつながれたヤギがいる。

里華は思わず変な想像をして心を和らげた。

（あれがヤギじゃなくて、『シカ』だったら、文字通りの『馬・鹿』だ）

それでも里華の心には、何か懐かしいものがこみ上げてきた。

建屋の中は老人が案内してくれそうだったので、里華は持ってきた沢山の十円玉を袋のままその馬面に渡した。

千円ちょっとくらいあったかもしれない。

二階の少女の部屋、というより一角は雑然としていた。

少女は、中学には行っていないと老人は言う。

駅で会ったあの少女は、ぼろぼろの服を着ていたが、里華が最後にみた夢の中では、中学校の制服をきていた。

あれは、里華自身の望みだったのか。それとも。

里華の夢にでてくる少女とそのノートに綴られたメッセージ。それは単なる想像や里華自身の夢の中の意識だけだったのか。

あの駅ホームでの出会い。夢の中の少女とそっくりの顔。

いや、それとも、ひょっとして少女自身が、里華にメッセージを送り続けていた？

里華は、そんな気がしてならなかった。

里華は、そのこと、つまり、少女自身が里華にメッセージを送り続けていた、ということの決定的な『証拠』たるものをそのとき手にしていた。

里華は信じられなかったが、信じなくてはいけない事実がそこにはあった。

少女の部屋には、里華の夢に出てくるノート三冊とまったく同じものがあり、その中に書かれていた内容は、里華の夢に出てくるものと、完全に同じものだったのである。

夢の中のノートに約六年間に亘って綴られていた数々の差別やいじめ。

そして少女の思い。

里華の自分自身の想像による夢の中の出来事と思っていたものが、そうではなくてそれは少女自身の手によってノートに綴られていた。何がどうなっているのかわからない。

信じる信じないではなく、また、夢のことはともかく、今、現に里華の手には、否定することのできない『事実』がある。

里華は、完全に心のコントロールを失ってその場に泣き崩れた。

脇にいた老人には何のことかさっぱりわからない。
しかし、大きな声で泣き喚く里華の姿を見て、老人はそのしわくちゃな頬を里華の背中に当てて言った。

「泣け。泣くしかのうときゃあ、泣けばえんじゃ。ええ、それでええ。」

<十四>

里華は、ふと、少女のノートの最後のページに、自分からメッセージを書いてみたらどうか、と思った。

それは物理の教師としては想像できないような、全く科学的根拠のない考えだった。

しかし、何となくそうしてみよう、と思ったのだ。

少女の心そのもののようなノート。

それは彼女にとっては手紙。

里華は脇に転がっていたボールペンを拾い、ノートに書き綴った。

《めぐちゃん。今どこにいるの？

お願い。おねえさんのところに出て来て。

そうしないと、あなたのお母さんが釈放できないの。

あなた、小さいとき、おかんむかえにいく、って言ってたでしょ。

あのときはごめんね。こんどこそ一緒にお母さん迎えにいきましょう》

ノートは持ち出してはいけないような気がした。

理由はない。そんな気がしたただけだ。

彼女の心は、生まれ育ったこの古原の地にある。

ただそれだけの根拠だ。

里華は、古原マーケットを出て、父母のいる家に帰り、もといた二階の自分の部屋で眠りに就いた。

そして、里華の夢の中には、少女がいた。

（めぐちゃん。こんばんは。とうとう会えたわね。）
里華は夢の心の中で言った。

少女は、暗闇のなかで、まっすぐに里華を見つめて何も言わずにいつものように一冊のノートを差し出す。

衣服は最後に夢に出てきたときの中学校の制服ではない。駅で見たようなぼろぼろの茶色い服である。

しかし、少女の表情はいつものように暖かい笑顔ではなく、どことなく悲しそうである。

里華は夢の中でそのノートを開いて内容を目で追う。

《おばはん。元気が。あたいは元気や。

犯人が殺人容疑でつかまったやさかい、もうそんでええ。

ちよつと、ちやうねんけどそんで満足や。

おかんにはメッセージ、夢の中で送つとるやさかい、それで充分や。おかんのおるどこかの刑務所にやあ、『位』^{イバク}っちゅうもんがあんねんけど、差別はないやねんで。

みーんないつしよの犯罪者やさかい。

おかん、出てきても、また差別されるんがおちやで。

あたい、だいいち生活でけへん。おかんを食わせていかれへんし。それに、差別されるんは、あたいだけで沢山や。おかん気の毒や》

(そう、あなたはそれでいいの？本当に。)
里華は再び夢の心の中で言った。

夢の中のノートが消えた。

しばらくして暗闇の中に月明かりに浮き上がる沼面のようなものが見えてきた。

そんなに大きな沼ではない。しかし、どこかで見たことのあるような沼。

その脇には大きな洋館が見える。

あ……。

あの沼はたしかこの近くにある。

大貫の沼だ。洋館が脇にある……。

ここから四キロほど離れたところで、川を渡った向こう側にある沼だ。

沼のほとりにもう一冊のノートが落ちている。

少女はそこにはいない。

里華は夢の中でそれを拾い上げた。

里華は夢の中でそのノートを開いて内容を目で追う。

書かれている字は、間違いなく少女のものだ。

そこには、そのとき流行のフォークソングのヒット曲の歌詞の一部が書いてあった。

フォークグループ『赤い鳥』、一九七一年のヒット曲。

その後、やまがたすみこがフォークアルバムでカバーし、のちには

学校教育の場でも広く取り上げられた誰でもが口ずさむ稀代の名曲。
『翼をください』のサビ部分の歌詞だ。

《この大空に 翼をひろげ
飛んで行きたいよ
悲しみのない 自由な空へ
翼はためかせ 行きたい》

そして、ページをめくると、そのあとには、少女の『詩』のような
ものが綴られていた。

《『あたいの空』

なあ、おまはん何のために、誰のために生まれてきたん？って、誰
か訊いてくれへん？
あたいはね。実はね。
驚いたらあかんで。

”空”のために生まれてきたんやで。

羨ましやろ。

だーれもまねでけへんはずや。

ああそや。

でもな。あたいはね。

”空”になーんも話しかけへん。

”空”のために生まれてきたっちゅうんに。
へんやろつ。

ああそやそや。

それからな。

”空”もあたいになーんも話しかけへんねや。
なーんも。

なあ。ええやろ。

なーんもないんが一番やで。

それでええんや。

でも、まねしたらあかんで。

これだけは。

なあ、早う誰か訊いてくれへんかなあ。。

おまはん何のために、誰のために生まれてきたん？って《

何故か涙が溢れる。

（そんなこと訊いて欲しいって言われたって、訊ける筈がないでし
よ）

里華はその裏のページにも何か書いてあることに気づいた。

《おおきにや。おぼはん。さよならやで》

その日を境に、めぐちゃんが里華の夢に出てくることはなくなった。

江戸時代には、その前の時代からあった、武士階級・町民農民階級を分けた身分制度の下に、もう一つ、著しく低い身分として位置づけられた階級がありました。

彼らは、職業や居住地を極端に制限され、衣食住すべての面で謂れなき差別を受けていました。

この差別を受けていた階級の人たちの多くは、生き物の『死』にかかわる職業の人々や神秘的な技能をもつ職能人たちであり、当時多くの人が思い描いていた『ケガレ』意識に合致させられ、これがのちの被差別部落の形成へと引き継がれていきました。

明治時代に入ってから、開放令によって身分制度そのものが廃止されましたが、被差別部落に対する偏見や差別はそのまま放置されました。大正時代には、被差別部落の人達が自ら不当な差別を解消しようと立ち上がった出来事もありました。

現在は、官民一体となって、多くの人たちや団体が差別の撤廃に取り組んでいます。

しかし、いまだに差別により結婚や就職の機会が閉ざされたり、日常の生活や子供の教育環境に支障が及ぼされていることがあるなど、解決していかねばならない問題を多くかかえています。

これは、差別を受けている人々だけの問題ではなく、そうでない人々も含め、皆で解決していかねばならない大きな問題なのです。

『夢の中の少女 平成22年6月』

(後書き)

今回の話は、背景に『差別問題』という大変デリケートな題材を含んでしまうことになりました。

取材をしている間にだんだんとこわくなり、場面設定を変えようとも思いましたが、やっぱり書こうと思ったきっかけは、文中にもあります、破れた子供の衣服がほしてあるのを見て目頭が熱くなったことからです。

これは現存していた事実です。

しかし、全体的な時代設定は現在ではなく、私が生まれる前の今から四十年ほど前になっていきますので、誤解を生まないよう、現在の状況とは違うことをもうし添えておきます。

もちろん文中の地名や人名はすべて実在のものに変えています。行ってみた現在の場所は、とても綺麗な生き生きとした商店街に生まれ変わっており、それもこれも地元の方や管轄の官公庁の方々の永年の努力によるものだ。と心から敬服いたすところです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7879/>

夢の中の少女

2010年10月10日16時26分発行